

史料紹介

天文八年十一月十三日付
室町幕府奉行人連署奉書

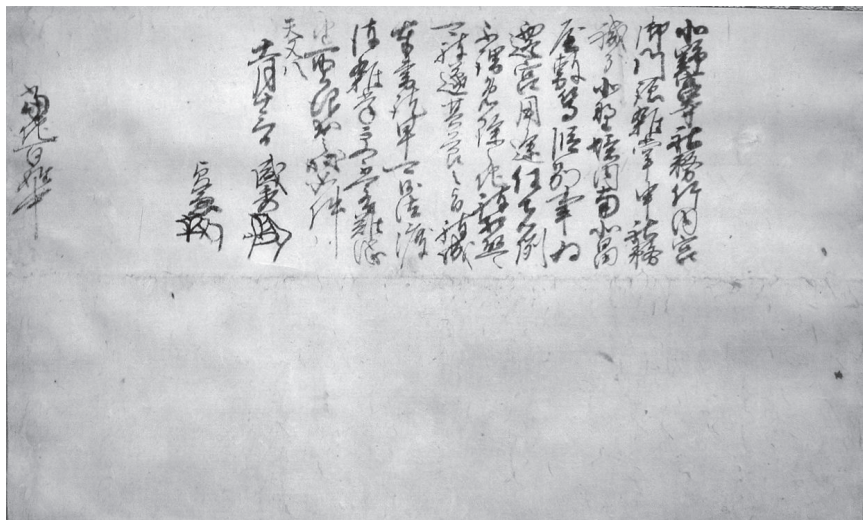
河内 将 芳

本史料は、奈良大学文学部史学科が古書肆より購入し、所蔵する古文書である。紙質は楮紙。もとは折紙文書であるが、現状は軸装されている。本紙の法量は二六・六糎×四四・六糎。

年紀は、天文八年（一五三九）十一月十三日、戦国時代の古文書となる。釈文を示すとつぎのようになる。

〔釈文〕

北野宮寺社務竹内宮「御門跡雑掌申、社務」職分北野
境内南北畠「屋敷等段別事、為」遷宮用途、任先例、「



不謂免除之地、被相懸之、」可被遂其節之旨、被成」
奉書訖、早可沙汰渡」彼雜掌、更不可有難」洪由、所
被仰出之狀如件、

天文八

十一月十三日

(松田)
盛秀 (花押)
(治部)

貞兼 (花押)

当地百姓中

差出のうち貞兼は、花押のすがたかたちから治部貞兼、
盛秀も同じく花押から松田盛秀であることが確認できる。
ともに、室町幕府右筆方奉行人として知られる人物であり、
したがって、文書名も室町幕府奉行人連署奉書となろう。

室町幕府奉行人奉書といえ、史料集として、今谷明・
高橋康夫編『室町幕府文書集成 奉行人奉書編』上・下(思
文閣出版、一九八六年)が知られているが、本史料はこれ
に所収されていない。また、『北野天満宮史料 古文書』(北
野天満宮、一九七八年)や『史料纂集 北野神社文書 筑
波大学所蔵文書 上』(統群書類従完成会、一九九七年)
などにも所収されていない。よって、新出史料となろう。

天文八年時点での室町將軍は、足利義晴である。その義

晴の意を貞兼と盛秀のふたりが奉じ、発給された文書とな
るが、冒頭に「北野宮寺社務竹内宮御門跡雜掌申」とある
ことから、「北野宮寺」(北野社、北野天満宮)の訴えに応
じて出されたものと考えられよう。

戦国時代を含む中世の「北野宮寺」は天台宗寺院として
知られており、その別当(社務)の職には、代々、竹内門
跡(曼殊院門跡)が就いていた。

天文八年時点の竹内門跡は、覚想である。覚想は後奈良
天皇の「御子」であり、天皇が踐祚する以前、和仁親王と
よばれた時代の大永五年(一五二五)四月一日に「竹内」(曼
殊院慈運)の「附弟」となり「御入室」、「御得度」したこ
とが、『実隆公記』^①同日条から知られる。ときに覚想は「十
一才」であった。

覚想が「北野社別当職」を「管領」したのは、天文六年
(一五三七)十二月二十九日であり、本文書はそれから二
年弱経った時期のものとなる。

文中にみえる「遷宮」は、天文八年十一月二十八日にお
こなわれたことが確認できる。『御湯殿上日記』^③同日条に
「こよひきた野のせんくう」^{(今市(北)遷宮)}、また『親俊日記』^④同日条に「北
野今夜御遷宮」、さらに『嚴助往年記』^⑤に「同廿八日、北

野宮御遷宮」、『壬生家四巻之日記』⁽⁶⁾ 同日条に「北野遷宮」などと記されているからである。

その「遷宮用途」として「社務職分北野境内南北畑屋敷等」に「段銭」が懸けられたが、「免除之地」の「当地百姓」が「難渋」したためであろうか、「先例」に任せ、「雑掌」に「段銭」を「沙汰渡」すようにとの「北野宮寺社務竹内宮御門跡」の訴えをうけ、幕府から出されたものであることが知られる。

遷宮が同月二十八日におこなわれることがさだまったのは、『壬生家四巻之日記』によれば、同月二十四日である。とすれば、それから十日ほど前の十三日にいたつてもなお、「遷宮用途」の「段銭」徴収が順調にすすんでいなかった可能性が考えられよう。

ちなみに、『嚴助往年記』⁽⁷⁾には、「同廿八日、北野宮御遷宮」のすぐ下に「江州進藤調之云々」とみえる。同じ『嚴助往年記』十月条には、「六角上洛、子息四郎上洛」⁽⁸⁾「相国寺番松軒陣所也」とあり、近江守護の六角定頼とその子義賢が上洛し、相国寺万松軒に寄宿したことが知られる。

その万松軒へ「公方様⁽⁹⁾両御所被申御成云々」と『嚴助往年記』には記されており、十月十八日に義晴と「若公様」⁽⁹⁾の

ちの義輝）が御成したことが確認できる。

定頼の有力被官のひとりとして知られる進藤貞治も上洛していたのかまでは確認できないが、六角父子が上洛している最中の十一月二十八日におこなわれる「北野宮御遷宮」の用途調達に、義晴をささえる定頼のため「進藤」が尽力した可能性は考えられよう。

注

- (1) 統群書類従完成会刊本。
- (2) 『史料稿本』天文六年十二月二十九日条。
- (3) 統群書類従 補遺三。
- (4) 増補統史料大成。
- (5) 国立歴史民俗博物館所蔵。
- (6) 宮内庁書陵部所蔵。
- (7) 天文六年八月十日付足利義晴御内書案（村井祐樹編『戦国遺文 佐々木六角氏編』東京堂出版、二〇〇九年、三八七号）。
- (8) 『親俊日記』天文八年十月十八日条。
- (9) 『親俊日記』天文八年十月二十四日条。

(付記)

本史料紹介をなすにあたっては、二〇二五年度に実施した複数の授業において学生諸君と読解した成果も含んでいる。